猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

獣害は国民的問題です

中山間地域では、営農意欲の減退と共に野生鳥獣に挑む力も減退しつつあります。
鳥獣害問題は中山間地域に住む人だけではなく、日本人全体の問題として、知恵と技術を出し合って解決することが、いま、求められている課題です。

国土の7割を森林が占める日本では、野生動物と人間は3万年もの間、小競り合いを繰り返しながら共存してきた歴史があります。
動物も人間も日本の生態系の中で生きる仲間です。彼らの存在を認め、その命の尊厳を大切にしながら共存していくことが、大切なことだと考えます。
野生鳥獣の急増は、自然環境の変化などが要因に考えられがちですが、地域の社会変化を見ることも重要です。
被害が深刻化している地域に共通するのは過疎・高齢化に伴う耕作放棄地の増加、そして地域における対策技術を持った担い手がいないことなどが共通しています。現在地域を支える世代が高齢化により現役引退を迎えていますが、後継者がおらず世代交代が円滑にできない状態で、コミュニティの維持すら困難となった地域が増えてきています。
獣害問題は、中山間地域に限られた問題から、最近では地方都市にまで波及し、市街地に紛れ込んだイノシシなにどよる、人的被害のニュースは珍しくなくなっています。
都市住民や若い世代にも獣害問題をより身近に感じてもらい、獣害対策支援の一員に参画して頂くことができないものかと考えます。
それには、都市部と地方で正確な実態把握と課題の共有を図るための、ネットワークを構築し、被害意識の共有や獣害に対する理解を深めることが第一歩です。意識差や少しでも被害を軽んじて考える人がいれば、対策に協力してもらえないかもしれません。中山間地域の現状を訴え、鳥獣害は国民全体の問題であると認識してもらう必要があります。
『獣害対策は地域全体で取り組むことが必要』。
これは獣害対策の基本です。だが、高齢比率が35％以上を超え、社会共同生活の維持さえが困難となりつつある中山間地域の現状では、野生鳥獣に挑む力は営農意欲の減退と共に衰退しつつあります。
さらに獣害による林業経営意欲の低下が深刻で、森林は荒廃の一途をたどっています。
森林は、国土の保全、水源の涵養（かんよう）、地球温暖化の防止、生物多様性の保全、木材等の供給などの多面的機能があり、農業被害もさることながら森林被害は、国民全体に関わる重大な問題です。
獣害対策を国民全体の問題として意識を共有できるような、国としての早急な取り組みが必要だと思います。

サル対策　夏野菜

心を込めて育て、収穫を待ち望んでいた作物が被害にあうことによる精神的ショックは深刻です。銭金（ぜにかね）に替え難いショックです。
頻繁に畑に行って、人間の縄張りを主張することが大切です。
サルが出没する地域では、小動物をはじめ、イノシシやシカも出る可能性があるので、しっかりした防護柵が必要です。柵は中途半端にケチってはダメ！、作るなら本気でコストバランス無視で！。
サルなど多くの動物は目で見て安全や餌の確認をします。餌を見せない工夫をすることも重要です。
サルの好物のイチゴやトマトなどは外から見えない側に実をならす、視界を遮る資材を使用するなど、いろいろな工夫をしましょう。
サルは作物を食害するだけではなく、枝を折ったり引きぬいたり暴れまくります。2～3頭の群れの侵入でも一面の畑の作物が全滅することもあります。
支柱は頑丈に設置し、それに葉茎を丈夫な紐でしっかり結わえて引き抜きを防止しましょう。
畑作物は、柵を設置することでサル被害を防止するができます。
群れの、数頭が柵を超え中の餌を食べられても他のサルが入れなければその畑はあきらめるといいます。
三重県の研究結果では、林縁から30メートル以内の畑、田んぼを電気柵で覆い、覆ってない農地を2割以下にするとその集落にはサルが来なくなったそうです。
同じく、三重県が開発した、サルの侵入防止用電気柵「おじろ用心棒」が効果的ですが、チョット高価です。
柵設置には、どうしてもコストバランスを考えがちですが、取られた時のショックを考え、銭金抜（ぜにかねぬ）きで取り組みましょう。
サルは本来は憶病で、人の気配のする所まで出没することはまれでしたが、近年では農作物の味を覚えて何度も人里に来るようになり、人慣れが進んでいます。
人慣れが進むことにより、畑の作物を荒らすだけでなく住宅の屋根に登って瓦をめくる、アンテナを倒す、家屋への侵入など生活環境被害につながります。
収穫の終わった野菜などの残さを畑に残さないよう、みんなで心がけましょう。
せっかく収穫までこぎ着けながら、乾燥、貯蔵の過程でサルなどの被害に遭うケースも多く発生します。
乾燥や貯蔵には、サルに見つけられない方法を講じることが大切。
近頃では、畑作業も機械化が進み、畑で作業する時間は昔と比べメッキリ少なくなっています。
頻繁に畑に行って、人間の縄張りを主張することが「コストゼロ」の最高のサル対策です。

モグラのこと　知ってますか

みなさんモグラのことご存じでしょうか。
モグラはポピュラーな害獣ですが、近頃ではサル、シカ、イノシシなど3獣の情報の陰に隠れて被害がありながらも、モグラの情報は少ないです。
そこで今回、モグラについてチョット触れてみたいと思います。
日本では北海道を除き全国各地に生息しています。
大別すると、東日本がアズマモグラ、西日本ではコウベモグラが大半を占めています。
ご存じの通り、モグラは地中にトンネルを掘って生活していて、地上に出ることは殆どなく、非常な大食漢で、胃の中に12時間以上食物が無いと餓死してしまうといわれています。
目は退化し小さく、耳の外形は小さいが聴覚は敏感、嗅覚も発達しているので音や臭いのバリヤーは効果的。鋭い爪のあるスコップ状の前足で土中にトンネルを掘り、ミミズや虫の幼虫を主な餌として活動しています。
冬眠などはせずに1年中活動し、寿命は約4年と考えられています。1年中活動していますが、春先の繁殖期が活動の活発化する時期になります。4～5匹の子供を産み繁殖力は旺盛です。
モグラは植物は食べませんので直接野菜が減るような被害はありませんが、野菜の根元を掘り進められると根菜類などに大きなダメージが出ます。ニンジンや大根などは根がデリケートな幼苗期に掘られると、枯れてしまい全滅の恐れもあります。
それ以外の野菜でも根が伸びるスペースに空洞ができるため、根が張れずに生育に悪影響が出ます。畑の土壌改良を担うミミズを食べまくるので畑が痩せてきます。また、用・排水路や田んぼなどでは、水漏れの原因になり農家の悩みの種となっています。
トンネル跡を棲家にするネズミによる被害も大きく、お年寄りにはこれがモグラの被害と間違えられています。
モグラは基本的には一年中活動しているので、いつでも捕獲はできますが、寒い季節は凍結などの恐れから深めに穴を掘るので深さの関係から冬場の捕獲は難しくなります。
捕獲の最適な時期は春先～秋口です。
モグラには絶滅危惧種・準絶滅危惧種が存在しますので、捕獲には行政の指導を仰ぐなど、十分な配慮が必要です。法律で許されているのは農林業に関係する有害駆除だけです。
☆臭いで追い払う
発達した嗅覚を利用し、臭いを発する忌避剤を巣や被害の出る場所に置くことでモグラを別の場所に移動させます。
☆音波で追い払う。
発達した聴覚を利用し、モグラの苦手な音波を出し、別の場所に追い払います。
☆捕獲する。
捕獲器を本道に設置し、進入したモグラを捕獲します。
色々な忌避剤や器材が市販されていますが一長一短があります。

外来種問題を考える

日本では約2、000種の外来種が確認されていますが、その中でも生態系や人間活動に影響が大きい生物を「侵略的外来種」と呼んでいます。哺乳類、鳥類、昆虫、植物、あらゆる生物に侵略的外来種が存在します。自然を悪い方向に変化させる原因には人為的なものを含めて数多くありますが、地球全体を一つの生態系と考えるとき、外来種が引き起こす環境への悪影響は計り知れないものがあります。
日本では意図的・非意図的に持ち込まれた動植物が外来種として社会問題になっていますが、逆に日本由来の動植物が外国で侵略的外来種として問題となっている事例も多々あります。たとえば、オーストラリアでは淡水の生態系を破壊する「最も侵略的な有害生物」に日本固有種のコイが指定されています。
注…日本固有種のコイは日本でも絶滅寸前で、いま日本にいるのはほとんど外来種といわれています。

また植物では、外来種のセイダカアワダチソウが一時期、環境や人の健康を害する外来植物として社会問題になったことがありますが、いま英国では19世紀頃に観賞用として持ち込まれた日本産のイタドリが、侵略的外来植物として社会問題になっています。

日本は、野生生物の輸入大国といわれていて、輸入される生き物は国際社会でもトップクラスです。膨大な生き物たちが国内に入った後の行方は知るすべがないとのこと。人間や在来種に影響を及ぼす病原菌や寄生虫などを持っていないかなども、詳しくわかっていないのが現状です。

外来種によって起こる問題はさまざまです。

新たな場所で生息するためには、餌をとったり、葉っぱを茂らして生活の場を確保する必要があり、もともとその場所で生活していた在来の生き物との間で競合が起こり、同じような食物や生息環境を持っている在来の生き物から、それを奪い駆逐してしまったり、近縁の種同士での交配が起こり、雑種が生まれるなど遺伝子が汚染されて、種としての純血と、病気などに対する抗体が失われる恐れもあります。

生物多様性にも悪影響を及ぼし在来の生き物の減少や絶滅など、地域の植生の変化などを引き起こします。

最も心配されるのが人間の健康への影響で、本来その地域や国に存在しなかった病気の発症と感染です。

国はこの問題を軽視しているとは思いませんが、実際的に今後何をするのか？。侵入の予防、野生化した侵略的外来種の駆除など、国として早急な対策が必要と思いますが、いまだにその姿は見えてきません。早急な施策の検討と、その実行がのぞまれます。

連絡会総会

平成29年5月13日、名張鳥獣害問題連絡会総会開催。

雨天にもかかわらず会員である北川三重県議や田北名張市議など多数が参加されました。

前年度事業報告、本年度の取り組みなどが議論された後、懇談会を行っています。

そのなかで、「三重県では獣害対策予算は、年々減額傾向にある。更に名張市でも獣害対策予算は、減ってきた」ことなどが話題にあがりました。

獣害対策は、いまだ道半ば、更に被害額が増加傾向にある中での予算削減は、一同「ガッテン」できない表情。

また、シカ、イノシシの被害の顕在化も話題になっています。

昼間でもイノシシが目撃されるとか、竹林が荒らされたとか、また、シカの出没が平坦部の圃場にまで伸びてきたなど話題はつきませんでした。その要因や、具体的な対策にまで話が及びませんでしたが、危機感は強くくみ取ることはできました。「全ての獣害対策は森林の再生に尽きる！」という発言が「てじめ」となり成功裏に閉会しています。

写真＝総会風景

研修会開催のお知らせ

みんなで守る！
集落で取り組む獣害対策に向けて

■日時：6月4日(日）13：00～15：00
■場所：国津の杜くにつふるさと館　（TEL：0595-69-1001）

《記》

■獣害対策に関する研修
■國津地区アンケート結果報告について
■結果を踏まえた今後の対策について（懇談会）
■講師
　三重県伊賀地域改良普及センター　主幹　市川　昌樹 氏
　三重県中央農業改良普及センター　技師　佐藤　恒亮 氏

【国津の杜くにつふるさと館・名張鳥獣害問題連絡会・名張市農林資源室】

チョット一服

豪州、外来種のコイに宣戦布告
ウイルス使って壊滅も

オーストラリア政府は、淡水で繁殖した外来種のコイを壊滅させるための新たな作戦を打ち出した。コイに感染するヘルペスウイルスの放出も検討しているという。

ジョイス副首相はこのほど行った議会演説で、コイについて「底辺にすみついて泥を吸うムカつく生き物」と形容。コイを駆除するにはヘルペスウイルスを使うしかないと力説した。

同国は正式に、５月１日をコイ（カープ）を壊滅させる「カーパゲドン」の日に制定。１５００万オーストラリアドル（約１２億円）をかけたコイ壊滅作戦の一環として、２０１８年にコイヘルペスウイルスを国内の河川などに放出する可能性があると発表した。

オーストラリア連邦科学産業研究機構（ＣＳＩＲＯ）では、同国の淡水の生態系を破壊する「最も侵略的な有害生物」にコイを指定している。

コイは１８５９年にオーストラリアに持ち込まれ、１９６０年代に養殖用のコイが手違いで放流されて大きな問題になった。メスのコイは年間１００万個もの卵を産む。

政府によると、コイはオーストラリアの固有種から餌や資源を奪って浸食を引き起こし、多くの固有の魚類を絶滅の危険に追い込んでいるという。

ジョイス副首相は、コイによる経済損失は年間４億ドルに上ると推計している。

（ＣＮＮより）

サルの出没状況
名張A・B群

名張Ａ群では、大量捕獲前は総数31頭。大量捕獲檻などでの捕獲は現在のところ９頭。残数22頭。

最近、27頭が目撃されています。増加の５頭は自然繁殖と思われますが、これが他群からの侵入であれば問題です。今のところＡ群では他群からの侵入はありません。

今後、両群とも他群からの侵入がないか注意深く見守っていく必要があります。

名張AB群とも大量捕獲の成否がわかるのは、まだ1～2年先になるだろうと思われます。

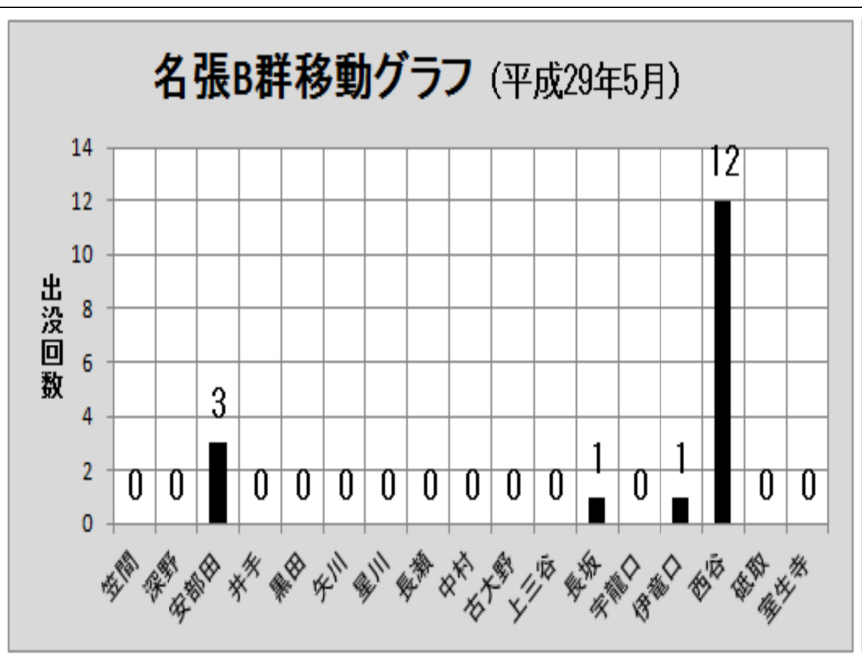
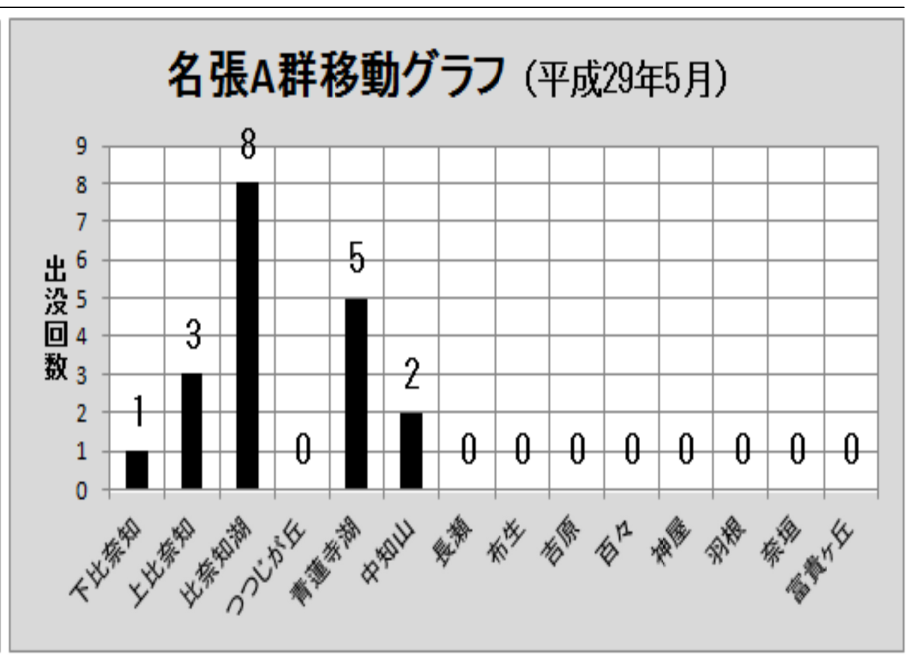
最近、Ｂ群は伊賀竜口から西谷地区周辺へ行動域を変えてきたようで、西谷地区周辺の出没が顕著です。

また、大量捕獲後、一年余出没のなかった、安部田周辺への出没情報が気がかりです。

指南員報告

Ａ群は、４月の下旬からは、比奈知ダム周辺の山林で活動していましたが、５月初旬には青蓮寺ダムの山中へ移動しています。５月中旬には比奈知ダムへ行き来しています。両方のダムとも道路と斜面で雑林の新芽を盛んに採食している現場を目視しています。

また、山中の竹林内の滞在が長く竹の子を採食しているように思われます。

Ｂ群は、４月下旬は、西谷方面で活動していましたが、中旬からは室生滝谷、長坂方面で電波受信がありました。西谷の阿清水川を横断するところを目視しています。

名張鳥獣害
問題連絡会
発行部数
錦生地区：100部
赤目地区：200部
箕輪地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部
市民センター：120部
（10地区）
名張市議会：20部
名張市役所：20部